埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

Searching for the Vanishing Point in Moving Images in Class

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-07-28
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 大國, 眞希
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/723

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

が爆破するシーンで、ネオが女の人をロープで助けるところや、仮想現実の中で、皆が壁の中を伝って逃げるシーンは、線の中を移動しているかのように、画面の中央に道があり、両側は真っ暗になっている。

この映画の支配者は実はコンピューターである。しかし、救世主であるネオが仮想現実であることを見抜いて、支配者であるコンピューターを破壊あるいは支配してしまう。

私たちの生きている世界は全てのことが影響しあっていると思う。自分の好きなこと、やりたいことのみを自分の力で決めていっている気がするが、実は意識をしていない（気づいていない）何かしらの枠の中で考え、行なっている。まず、その気づいていない枠があるということに気づく。そして、それを意識した上で決断を下し、実行していくことで、「マトリックス」でいう支配者の交代になるのかなと思う」。

映画で示される世界観、世界を構成する細部・イメージなどを巧みにつなぎ、「マトリックス」の世界を把握し、論を進めている。

九、なぜ〈消失点〉を考えるのか

今回の課題は、「マトリックス」の〈消失点〉を探し、その根拠を述べ、それを踏まえて「マトリックス」の解説をする、というものだった。ただ〈消失点〉を見つけ出すことを目的化してはいない。それによって「マトリックス」の世界を把握し、その視点から世界を自分の言葉で読み直すことが肝要である。

「マトリックス」において、ミスター・アンダーソン改めネオはそれをする。〈消失点〉を得た彼は、ただ世界を理解するだけではなく、世界に話しかけ、世界を変える。「マトリックス」を観ている観客である私たちも、そこから抜け出し、「マトリックス」の世界を理解し、自分の言葉で語り直していくことが求められているのではないか。

文字は、「マトリックス」で言えば、コンピューター言語と重ねられる。それは活字で書かれていながら、私たちにはある世界をつくって見せる。私たちはそれをあたかも「現実」であるかのように受容する。私たちはその〈消失点〉を探すためには、まずその世界に没入してみなければならない。その世界に浸ったうえで〈消失点〉を探す作業をする。文字を体感したうえで、〈消失点〉を探し、世界の細部を組み上げて再構築するひとつの訓練として、今回の授業ではすでに映像化された映画の世界から〈消失点〉を探す作業を試みた。この後の授業において、再び文学作品を取り上げ、さらにそれら一連すべての授業を通して、どのように学生が変わったか、変わった／変わっていないと彼ら自身が考えたのかなどの展開については、紙面の都合上、別稿に記する。

（平成22年9月30日提出）

る点がある。そして「自由」を象徴する存在として「ザイオン」が挙がる。よって、「ザイオン」が消失点である」。

同様にYさんは次のように書いた。「消失点→ザイオン（現実世界の唯一の人間の住む町）。理由。この映画はコンピューターに支配された仮想現実世界が舞台となっている。コンピューター自身が人間をエネルギーとしてコンピューターを操作している。しかし、元々は、このコンピューターを扱っていたのは人間であった。人間が発端で、コンピューターを支配し、この物語が拡がっていったのだと思う。ところがその唯一の人間の住む町が名前以外に存在していなかった為に消失点だと思った」。

名前以外に〈存在していない〉ものを〈消失点〉とする指摘は鋭い。また、「マトリックス」の世界を「現実」と「仮想現実」の二つと定義分けするのではなく、三つに設定しているのも独創的である。

ザイオンは神話に登場する名前である。それを、映像と重ねあわせたときに、映画のどのような細部が立ち上がり、物語として結び合っていくのだろうか。更なる考察をすれば、更に説得力を増すだろう。

八、電話・プラグ系列を〈消失点〉とする意見

「電話」や「電話回線」などの系列を〈消失点〉を挙げる学生も多かった。確かに、電話は登場人物たちが船と「仮想現実」の世界を行き来するために利用しており、物語の冒頭でミスター・アンダーソンにモーフィアスらから電話がかかってくる場面がある。また、結末ではネオとなったアンダーソンがコンピューターに電話をかけている（余談であるが、デカルトは脳の松果体を心身の接合箇所と呼んでおり、プラグを想起させて面白い）。電話や電話の回線は、「現実」と「仮想現実」の境界であるとも考えることが可能であり、これらを〈消失点〉とする考えも肯ける。そのなかで、単に境界であるから、物語の冒頭と結末に出て来るからとの理由からだけでなく、自分の言葉で世界を捉えている意見があった。それはMさんの以下のような意見である。

「この「マトリックス」という作品を見て、ポイントだと感じたことは「線」である。「線」をイメージとして「つながる」「逃げられない」「操る」「支配する」という四つがある。

まず「つながる」から考えると、現実と仮想現実が電話線によってつながっていて、この電話線によって行き来ができる。そして、仮想現実に入っていく時は、頭の後ろにプラグを刺し込んでいる。

「逃げられない」から考えると、コンピューターによって支配されている人間は、カプセルの中で、コンピューターの動力源として、つながれ栽培されている。「操る」は、映画全体のアクションシーンが紐で吊られた感じがして、操られている。

また、印象に残るシーンとして、女の人がヘリを操縦して、ヘリ

や両側を武器で固めるシーンなどから血管の中にいるような感じを出していると思いました。最後にまだ敵を全滅させていないことから、癌は目に見えにくくてもひそんでいることをにおわせていると思いました」。

映画での電話の役割を「神経伝達物質」とする比喩には説得力がある。そのうえで、エージェントが人間を癌細胞と呼んでいたことに着目し、エージェントこそが癌細胞なのではないかとする発想の転回が面白い。Kさんは「マトリックス」の世界を反転して見せた。

更に、「現実に引き戻され、船の生活もまずい食事も嫌になり仲間を裏切り、仮想現実で生きることを望んだひとりの船員を見て、人間の幸せとは一体何だろうと思った。仮想現実は植物人間の夢の世界と同じだと思った。人は何をしたという事実がなくても仮想で幸せでいられたら、それが幸福といえるのか、それとも現実を見て戦っていき、幸せと自由を勝ちとることが幸福といえるのか。

そのような視点から見て消失点だと思った所は、仮想現実で生活する人達の感情をつくる数字の暗号だった。

心と体はつながっていて、あたかも現実のような世界の幸せでも、それは機械にあやつられているだけで、つくりものでしかない。実在しない事実である。仮想現実での幸せもつくりものでしかない。仮想現実では、現実の自分の存在（エネルギーとしての使われるだけ）でしかないという事実からの逃げ道だと思った」と書いた「仮想現実で生活する人達の感情をつくる数字の暗号」との考えをするMさんの意見もそれに連なるもので、個性的で説得力の高い意見であった。

七、三つの世界と〈消失点〉としての「ザイオン」

Tさんは〈消失点〉をザイオンとして、以下のように映画を解説する。「映画「マトリックス」の世界には三つの世界が存在している。一つは「仮想現実＝マトリックス」、二つ目は「コンピューター支配による現実世界」、三つめは「人間によって産まれた人間のいる世界ザイオン」である。

この三つの世界にはそれぞれ「枠」がある。マトリックスはコンピューターの数字の羅列でできた世界、現実世界では液の中の人間を包んでいる「膜」、ザイオンでは「自由な世界」と表現されている。

また「仮想現実」と「現実世界」の共通しているのは、「拘束」である。「仮想現実」ではコンピューターのつくった世界に閉じ込められているためであり、「現実世界」は「膜」によって拘束されている。以上の事から、コンピューターの支配の永続のため、人間をマトリックスに閉じ込め、「自由」を与えないようにしたいと考えており、逆に主人公達はマトリックスの中にいる人間に新しい世界を見せ「自由」を与えたいと考えている。これらのことから、この二つには「自由」というものが双方の考えにあり、互いにぶつか

結局は「赤い丸薬＝知恵の実・りんご」を飲ませてしまう。モーフィアスを「蛇」と考えると、マトリックスは「エデンの園」、そしてコンピューターはそれを司る「全知全能の神」ということになる。

全知全能の神＝コンピューターは、人間のイメージを操り、支配しているのであるから、そのなかでの戦いは当然イメージ上の戦いということになり、イメージ・コントロールをマスターした人間はコンピューターと互角に戦うことができる。

しかし、一方、人間にはイメージの飛躍を妨げる大きな障害がある。肉体である。「心が死ねば肉体も死ぬ」という台詞があったが、同様に、肉体が死ねば心＝イメージもまた滅びてしまう。訓練によって際限なく進歩することが可能なイメージに比して、モノを食べなければならない肉体は旧態依然として何と進歩がないことだろう。

とは言え、イメージの表象は、やはり肉体という形をとるしかない。一九世紀では憧れにとどまり、二〇世紀になってようやくその入り口に達した「仮想現実」の世界の中で、この映画の舞台となっている二三世紀になっても、闘いのほうはやはり肉体のぶつかりあいである格闘技になるというのが、なんとなくおかしい。

イメージ上の肉体が闘いでダメージを受けると、痛いのは現実の肉体である。痛みはイメージ上の感覚に過ぎないものを現実の感覚として認知する、最も鋭いものにちがいない。映画の一場面に過ぎないサソリの場面や電極の場面でゾクゾクしてしまうのもそのためである。さて、コンピューターに痛覚はあるのだろうか。

そして、もう一つ、この映画の重要な点である、「信頼」および「愛」という感情も、肉体抜きには考えられない。仲間の信頼を裏切らぬために肉体的苦痛（脳内の戦いであるから、イメージ戦でもあるが）に耐えるモーフィアス。血まみれになったネオの唇にキスをするトリニティー。これらはコンピューターの持ち得ぬ感覚であり、世界である。この感覚の世界を認識し、この世界に立ったネオ達にはコンピューターは勝つことはできない。

イメージばかりが膨らみ、肉体は繭にくるまれてまどろんでいるマトリックスの世界を突き破り、本物の世界に到達するには、もっと自らの肉体感覚に目覚め、研ぎ澄ましていかなければならない。

〈赤〉に消失点を求めたとき、この「仮想現実」である「マトリックス」の世界が、肉体性、血を彷彿とさせるものによって生成されていると考えられることを示す意見だ。

「仮想現実」であるはずの〈マトリックス〉が、そして、「仮想現実」の世界で超人のように活躍する人間が、実は肉体性、血によって生成されていること。それが「マトリックス」を矛盾の抱えた世界と思わせ、またアンダーソンを救世主として復活させるという奇蹟を起こさせた種（トリック）である。

Kさんは次のように記した。「マトリックスの世界を人間の体だと考えます。エージェントは癌細胞で、人間が癌と戦っていく様を表していると思いました。電話は神経伝達物質で脳から指令を送っています。映像効果として両側を壁で挟まれた所を移動するシーン

は仮想現実（夢の中の世界）、二つ目は人間は眠っているという世界で、この二つはいずれもコンピューターの中のことでありました。そして、最後の一つはコンピューターも世界から抜け出した人たちの住む世界です。この中で客観的に見て人間らしく生きているのは、夢の中の世界の人たちですが、この裏にはコンピューターがいて、その現実は〈夢〉でしかないのです。眠って夢を見ていることが真実なのです。そしてもう一つの真実が船に住む人たちです。彼らは一見、全然人間らしくないです。すごい力（パワー）をもっていたり、電話を使って、世界と世界を行き来したり、コンピューターの中で訓練したり。でも、まずい飯を食べ、すごく重いものを背負い、自分の命をかけて生きています。そしてその中で人を愛し、自分の弱さに負けたり、また何かのために強くなったりしています。そして運命を自分の手でつくっていっています。私は最初、何が幸せなんだろう、何が人間らしいのだろうと（たとえ夢の中でも、幸せに暮らしているほうが幸せだし、人間らしいのかとも悩みました）分らなくなってしまいましたが、やはりコンピューターから離れた〈船〉に住む人たちがＢＥＳＴ ＯＦ 人間らしさだと思いました。

私はコンピューターが消失点であると考えます。幸せな仮想現実がコンピューターによるもので、自分たちの力で生きていて、運命を開いていく彼らがより輝いて見えるからです」。

このＨさんの意見には、自分たちの力で生きているひとたちの〈消失点〉としてのコンピューターという転倒した発想が観られる。

また、Ｎさんはこのように書く。「仮想現実の世界はコンピューターで示されていると分った場面は、銃で撃たれるたびに現実の世界の人間にも撃たれた反応が出ている所（現実の人間が口から血を流したり、体が振動したりする場面など）」。

「仮想現実」であるから、そこで撃たれても死ななくて当然との考えもあるが、この映画では「仮想現実」で受けた傷に対しては、その反応が出ていた。モーフィアスの拷問も「仮想現実」でなされていたが、生身のモーフィアス（船に残された肉体）も苦しんでいた。それはどういうことなのだろうか。一方で、ネオが「仮想現実」において銃で撃たれたとき、一度は心拍が停止するが、復活してくる。このような「奇蹟」を「マトリックス」のどのような種（トリック）が可能としているのだろうか。

Ｉさんは次のように「マトリックス」を解説した。「私は「痛み」に弱い。病院に行っても痛みを伴う処置をされると、つい騒いでしまい、看護婦（ママ）さんに叱られる（だから、日本の看護婦（ママ）さんはキライだ）。この映画では痛そうな、いやものすごく痛いに決まっている場面が実にしばしば表れる。特にサソリがお臍にもぐりこむ場面やうなじに電極を突っ込まれる場面は体の奥までぞくぞくするほどの感覚＝痛さが伝わってくる。

『マトリックス』を『桜桃』風に読んでいくと、主人公のネオを「救世主＝キリスト」とするならば、トリニティーは死せるキリストに口づけするマリアになる。一方、赤い丸薬と蒼い丸薬を選ばせ、

「現実」「仮想現実」が錯綜するなかで、なにが本当にリアリティーであるのかをSさんは考察している。では、コンピューターの世界である「仮想現実」と人間の世界である「現実」と〈赤〉とは映画の細部とがどのようにつながり、世界を展げていくのだろうか。

別のSさんは〈消失点〉を「赤ちゃん」ではないかと考える。「コンピューターにつくられた「仮想現実」の中で〈現実〉と信じて生きている人間たち。しかし、実際はマトリックスの中で夢を見ているだけ。本当の現実は人間がコンピューターのエネルギー源となり、眠らされている世界であった。世界の動力が人間であり、新しい生命＝赤ちゃんが未来を生み出す」。

「人はどうやって生殖しているのか」という疑問を書いてきた学生もいた。そのような疑問について独力で考えたSさんの意見は、コンピューターが作り出すほんとうのような世界と人間がリアルだと信じられる世界の相違が一体どこにあるのか、映画がどのようにそれを示しているかの解答を模索している。

Iさんは「現実」とは何か、「人間存在」とは何かということをこの映画はどのように描いているかを考察しようとしている。「消失点→救世主。映画全体を通してCGを使ってつくりだした仮想現実のなかで、自分が現実であると信じていたからこそ人間には不可能であったこと（銃弾を止める。一度停止した心臓が再び動きだすなど）を可能としたという意味で救世主であるが、非現実的な世界の中で、自分が（周囲のひとたちはネオが）救世主であると信じること、運命を切開くというような極めて人間臭い部分を強調していることを考えると映画の世界と救世主は対照的なものであると思う」。

〈消失点〉を「エージェント」であると考えるSさんは次のように書く。「この映画の世界観をつくり出しているのは、現実においてはカプセルに入った人間を支配し、仮想現実ではマトリックスに入り込んだ人間達を殺そうとしているエージェントを作りだしたA・I・コンピューターであるはずだが、マトリックスにおいてエージェントはA・I・に支配されて動いているというより、むしろ自分の意志でアンダーソン達を追いかけている」。

別のSさんも言う。「エージェントはA・I・ということだけど、エージェントスミスは、人間くさい欲望や怒りを持っていて面白い」。

モーフィアスを拷問しているときに、エージェントのひとりが耳にしているイヤフォンのような器具を外し（そうすると彼は「仮想現実」で起きていることが聞えなくなる）、人間の臭いに対しての不快感、人間への嫌悪を述べる場面がある。コンピューターの一部である割には「人間臭い」行動だ。「A・I・」は「あい」つまり「愛」と変換できる。このような人間とコンピューターとの転倒がこの映画の主旋律とも考えられるのではないだろうか。その意味では、上に紹介した「赤ちゃん」を〈消失点〉とする考えも「エージェント」を〈消失点〉をあげる考えも、「救世主」を挙げる意見も同じ一点（「マトリックス」の本質）を感じて取っている。

Hさんは書く。「マトリックスには世界が三つありました。一つ

ダーソンの身に起こったことは、この赤い薬によってつくられたとも言える。ゆえに、赤い薬を〈消失点〉を指摘するのは的を射た意見である。

キリストとアンダーソンを重ねたときに「赤い薬（カプセル）」が「禁断の木の実」にあたるのではないかとの学生の考えは前述した。ほかに「赤い服の女性」「赤い血」「赤ちゃん」の系列で、この赤の薬でつくられた世界を考えることが可能である。つまり、〈消失点〉として、〈赤〉を挙げられる。

Mさんは言う。「『マトリックス』の映画の中には二つの世界が存在している。一つはコンピューターの支配する仮想現実の世界。もう一つはコンピューターの支配の及ばない本当の現実世界。このふたつは作り出されている嘘と本当だが直視するには辛い隠さなければいけない真実である。そしてこれらの世界を表現しているのは黒と白である。映画の中でも主人公や主要な登場人物は黒と白を着ていてこれらの世界を暗に表現している」。

Kさんは書く。「消失点。赤い服を着た女の人。ネオがこの世界は「マトリックス」であることを見破った場面だったし、こういう女の人もコンピューターでプログラムすることが出来るのだ理解する原因となった人だから、というのと、映画の中で何回か暗示的に出てくるから」。

Sさんの意見。「消失点。赤い服の女性。映像がごちゃごちゃしていたが、赤い女性だけが輝いてみえたから、現実っぽかった」。

また、別のKさんも言う。「消失点。赤い服の女性。仮想現実の世界の中に現実的な色（赤）がでてきたと思ったから」。

更に別のKさんの意見。「消失点。赤い服の女性。白黒の世界の中で、唯一、赤い服を着ていた。仮想の世界の中での現実の部分をその女性が表現しているのではないかと思った。仮想の中の一つの現実。それが「マトリックス」＝仮想現実の謎を解くポイントではないかと考えた」。

コンピューター上でシミュレーションとして見せられる「仮想現実」の世界。そのなかで誰が敵なのか、何が「現実」なのか、そのときのアンダーソンはまだ見分けることができない。白黒の「仮想現実」のなかで赤色が際立っている。

赤いカプセル。赤い服の女性。確かに、「マトリックス」において〈赤〉は「現実」にまつわる色として出現している。

これらの意見を更に進めて、Sさんは言う。〈消失点〉は「赤い血」である、と。「赤い血。コンピューターは血を流さない。人間は本来生態系の一部（哺乳類）という前提のもとに→情報化においてコンピューターはなくてはならない存在にあり、又、人間以上の能力。世界を作り出せるかも知れない。→しかし、それはプログラムされたものであり、1か0にすぎない。人間は信じること、愛するということ、を可能にする。自分が自分である。生々しい血の流れ、五感を持つ人間であるということを気づがせる、それが本来のリアリティーである」。

え、実は愛がないはずのコンピューターが人間を恐れていたのではないかと考える。その逆説的に思える場面。それが〈消失点〉ではないかとは鋭い考察だ。また、アンダーソンが寝ているものを「カプセル」と表記している。これは赤い丸薬（カプセル）とイメージとして重なっている。イメージの韻を踏む可能性を示唆する表現といえる。

Sさんの意見。「マトリックスの世界は仮想現実の世界であり、現実として起きているわけではない。ゆえに銃で撃たれても仮想現実では生きられるはずである。これを示している場面がミスター・アンダーソンが撃たれたが生き返る場面である。これにより、この世界がマトリックスによって作り上げられている世界であり、本当の世界とは異なることが実感できる」。

文字通り、ネオは体を射貫かれる。この実感が世界を支えているというのは、重要な指摘である。Sさんは、世界を作り出している核となるものの感触を実感し、〈消失点〉をとらえて、体感している。

Hさんは次のように書く。「消失点だと思うところ。ネオがエージェントに銃で撃たれて、一度は死ぬけど、また生き返るところ。その理由。銃で撃たれたこと自体がコンピューターによるもので、「現実」ではないので、本当は死なない。この映像が、「仮想現実」の世界が実はコンピューターによってつくられていることを強く示していると思う」。

Aさんはアンダーソンの復活を奇跡として捉え、SさんとHさんは「仮想現実」で起こったことであるから当然であると考えている。アンダーソンは心拍が停止しているので、実際に肉体的に死亡したのであるから、Aさんの言うように、生き返るのは奇跡である。また、一方で、弾で射貫かれたのは「仮想現実」の世界であるから、復活は当然であるとも考えられよう。このような対立した二つの意見の両方が正しいと考えられる矛盾もまた、「マトリックス」の世界の特徴とかかわるのではないだろうか。この一見、矛盾した世界を表すものとして、〈赤〉があると考えられる。

六、色彩からのアプローチ――「赤」という〈消失点〉

色彩に関するもので〈消失点〉として学生にあげられたのは、「赤い服の女性」「赤い血」「赤ちゃん」「赤のカプセル」という赤。「緑（青）のカプセル」。「白と黒」「黒猫」である。

カプセルについては、いずれを飲むのか、その選択を迫られる場面がある。もしも日常（実はコンピューターが見せている「仮想現実」の世界）へと戻りたければ、青（緑）のカプセル、真実が知りたければ赤を飲むように、と。つまり、「赤のカプセル（丸薬）」を呑んだがゆえにアンダーソンは〈マトリックス〉から覚醒し、「現実」を見る（真実を知る）こととなるのであるから、その後、アン

を歩むことだ」があった。決められた道（将来）の上を歩くのではなく、自分が決めた道を選ぶことが現実で、何かに支配された世界が仮想現実なのではないだろうか。本来、予言者などは存在しないのではないだろうか。未来を決めるのは、自分自身であって、誰かに決められるものではない」。

Uさんは、モーフィアスの台詞を心に留めている。一文に感動して心を留めるのは〈消失点〉を考えるうえでも大事である。「マトリックス」は現実と仮想現実とが物語の中心線となり、それらに人間とコンピューターとが絡みあう。そのため、「マトリックス」の世界を考えるためには、まず、「マトリックス」の世界において、〈現実〉と〈仮想現実〉とがどのような物として描かれているのかを考えなくてはならない。Uさんは、感動を機軸として、自分なりの現実と仮想現実の定義をしている。世界を自分のことばで解説をしようとする姿勢が窺える。

エージェントはコンピューターによって生み出されたA.I.である。ならば、人間とはかけ離れた存在であるはずだ。しかし、エージェントは人間が臭いと言い、人間に憎悪の感情をぶつけ、「人間的」な振る舞いをする。それに対して、アンダーソンは人間の救世主で、人間の中の人間と言えるだろう。それでいながら、とても人間とは思えない、超人的な側面を見せる。

そもそも、「マトリックス」は仮想現実と現実の対立が見られるが、「仮想現実」のほうが、私達が考える人間らしい生活のように思える。「仮想現実」のほうが「現実」よりも現実らしいならば、私たちは何にリアリティーを求めたらよいのだろう。

現実と仮想現実、コンピューターと人間。これらがそれぞれに前述のような矛盾した性格を有しているのは、一体、どういった訳なのだろうか。

Aさんは以下のように書いた。「ミスター・アンダーソンがネオに生まれかわる時の映像が消失点だと思う。たくさんの人間がカプセルのようなものの中に入っていて、死んだ人間の養分を得て生きているという真実を知ったとき。

「マトリックス」＝仮想現実の世界というのは、コンピューターでつくられた世界であって、一見、完璧のように思えるが、現実の世界と違うところは、人と人との愛情があるかどうかということころだと思う。ネオがエージェントに殺されても、人を信じ、愛を信じて、ネオを信じた仲間がいたおかげでネオは生き返ることができた。特にトリニティーの愛によって、マトリックスの世界にはない愛の力によって、奇跡が起きたんだと思う。マトリックスの世界のエージェントも、おそらくその力を少なからず恐れていたように思える。なぜなら、モーフィアスがつかまって、薬を打たれた時のエージェントの台詞、やや取り乱した様子が、この映画の中で唯一マトリックスが現実世界に対し、恐れを見せた場面だからだ。そう考えると、この場面が消失点のような気もします」。

人間とコンピューターの違いを愛から考えた意見である。そのう

た。課題提出前に筆者の「マトリックス」の解釈は一切告げていない。以下、学生たちがどのようなものを〈消失点〉として考えたかを紹介しながら、考察を加える。

消失点はその世界には明示されないが、その世界を生成する。その概念性を考えると、この映画の〈消失点〉を「予言者がアンダーソンを救世主と予言しなかったこと」とした指摘は的確である。「しなかったこと」が、この映画の世界を生みだしている事実を突いている。同様の理由から、「無の世界」との意見も的を射ている。ただその説明がなされていなかったので、どのような考えから「無の世界」を指摘したのかは残念ながら判然としない。〈消失点〉ではないがと断ったうえで、世界観を示す美術効果として三六〇度の世界を挙げているひともいた。

遠近法とは通して見るという語源をもち、窓やスクリーンなどを通して世界を見ることと解される。その意味でも「画面」を消失点としている意見は興味深い。「画面」をあげているMさんは、以下に引用するように、私達観客が映画を見ているという次元までも視野に入れた意見を提示している。

「マトリックスの消失点は、コンピューターの画面であると思う。コンピューターの画面の中でマトリックスの世界は繰り広げられている。それを意味するように弾丸がスローモーションになったり、ストップモーションになったりしている。またヘリコプターがビルにぶつかった時、ビルの壁が一瞬歪んだようになる。画面の中の世界を画面の外で操作し、それを見ているのだと思う。主人公が銃で撃たれて一度は死んだにもかかわらず、再び生き返ることが出来た。これはコンピューターの箱の中で、画面の外から支配（操作）されていたのが、自分の意志で自分をコントロールできる存在になったからである。映画の中では主人公は救世主であるが、コンピューターの世界（マトリックスの世界）では、彼はコンピューターに侵入して、中味を破壊していくコンピューターウィルスであると考えられる。

「画面」を通してマトリックスの世界を見ており、映画の世界を見ている私たちも「画面」を通していることで、私たちの姿もどこかの「画面」で見られているような、幾重もの世界が重なり合っているような感覚を起こさせる映画である」。

「画面」を〈消失点〉と挙げた点が素晴らしいのではない。それを基にしてMさんなりの「マトリックス」の世界を捉えている点が素晴らしく、傾聴に値する。殊に「マトリックス」の内部だけではなく、「マトリックス」を観る私たちの見方までもを視野に入れた意見を述べていて、〈消失点〉をめぐる考察を深くしている様子が窺える。

Uさんは以下のように述べる。「予言者の言葉をネオは信じて、自分は救世主でないと悟り、自分には人を救う力はないと感じる。しかし、仲間が窮地に陥ったとき、ネオの本当の力が発揮される。モーフィアスの言葉の中に「知る道を歩むことではなく、実際の道

遺体を抱きかかえながら、悲嘆にくれる。この場面の構図は学生も指摘したように、キリスト教の絵画で頻繁に描かれるピエタを類推させる。

この時、今まで物語上、矛盾を起していた設定が圧縮され、ある大円団をもたらす。予言者はアンダーソンにはあなたは救世主ではないと告げていた。一方で、アンダーソンを愛しはじめるトリニティーに対して、「あなたの愛する者こそ、救世主である」とも言っていた。その矛盾が解決をみる。弾丸によって口を開けた死の淵で、予言者の何気ないつぶやきが重要な意味を帯び始める。「あなたには何かあることは感じるが、残念ながら、来世のことかしらね」。

弾丸によって穿たれたアンダーソンの内で、ある決定的な変化が起きる。それは、ちょうど〈消失点〉を設定されたばかりの絵画のように、彼の内に新しいパースペクティヴを開く。弾丸は、今や、彼の目には止まってさえ見える。スローモーションという漸次的な動きは、今やその極に達しているのだ。彼は何の苦もなく、その弾丸を手にすることができる。弾丸はコンピューター言語と重ねられていた。その弾丸を手にすることができるということは、ただ受動的に解析するだけの世界をみずからの手で操作できるようになったことを意味するのではないか。その時、彼の視界に映る世界そのものがスクリーンに映し出される。それは他でもなくコンピューターが作り出す情報（言語）の群れである。

コンピューター世界から弾丸を打ち込まれることによって、コンピューター世界を〈理解〉するだけではなく、世界の外部となるのだ。〈マトリックス〉は人間をある独立した存在とは見なさない。人間は〈マトリックス〉という（超）有機的な存在に属した部分、もしくは異変を起した癌細胞のようなものである。〈膜〉によって、「仮想現実」を形成するコンピューターにとって、人間はその〈膜〉に映る「仮想現実」を形作るひとつの要素に過ぎない。コンピューターにとっては、人間が個別の意識をもっているなどとは、思いもよらないだろう。ところが、物語のラストでは異物化されたものが不気味な声でもって彼に話し掛けてくる。ネオが受話器からコンピューターへと語りかけるのだ。このとき、〈マトリックス〉は何を思うだろう。かつての自分の創造主からの疎外感のようなものであろうか。

物語の始まりに流れ落ちる言葉の切れ目を潜り抜けて現れた暗闇は、そのまま主人公の眠りの場面へとスライドしたが、コンピューターも主人公が救世主として目覚めたあのとき、軽い眩暈を感じたかもしれない。

五、学生たちはどのようなものを〈消失点〉と考えたか

全員で一度、映画を観たのちに、「マトリックス」の〈消失点〉を指摘し、その理由を述べ、映画の解説をする課題を学生に提出し

四、「救世主」の物語と〈消失点〉

ふたりの学生が「マトリックス」の背後にキリスト教的な物語を見ることができるのではないかと指摘した。そのうちのひとりは〈消失点〉として「赤の薬」をあげた。そして、「この薬を飲んだために彼は「マトリックス」を抜けて「現実」の世界を見たのだから、この薬が〈消失点〉と考えられる。そう考えると、この「赤い薬」は禁断の知恵の木の実（林檎）と重なるのではないだろうか」と指摘した。もうひとりは、「〈消失点〉はわからないが、物語の最後のほうで、女の登場人物（トリニティー）が弾で射貫かれて心臓が停止してしまったアンダーソンを抱き上げてくちづける場面は、マリアがキリストに口づけする場面と重なるような気がする」との指摘をした。

確かに、キリスト教の世界で救世主と言えば、イエス・キリストを想起することが可能だろう。ミスター・アンダーソンはアンダーソンのほかに救世主としてのネオという名前がある。イエス・キリストも、人間的な側面を話題とするときはイエスと、救世主としての側面が強調されるときにはキリストと呼ばれる。

「聖ゲルギオクスの槍」または「聖ジョージの竜退治」と称される、絵画で繰り返し描かれる場面がある。竜を人間が刺し殺しているこの場面は、理性が混沌を制圧する寓意だ（中沢新一『イコノソフィア――聖画十講』河出書房新社、一九八九・一〇など）。日本では、槍ではなく、弓矢をもって語られることもある。例えば、太宰作品「東京八景」の結末で、物語を語る準備の整った姿勢が、弓矢をきりりと絞る寓意によって語られる。遠近法、パースペクティヴとは一般的には、ある「物の見方」を意味する語として用いられる。つまり、線遠近法とは文字通り、理性の網の目をかけて、ある立ち位置からある方向性をもって見ることにより、世界を確立することだ。そして、そのときに措定される〈消失点〉とは、無限に後退していく点であるために、槍や弓で貫かれるが如く、ある〈穴〉としても私たちに捉えられる。

キリスト教の世界で言えば、キリストの聖痕（スティグマ）が注目されよう。キリストが処刑されたときに穿たれた五つの傷――手足に釘を打ったために開いた穴と、脇にロンギヌスの槍によって開けられた穴――をめぐって、復活を遂げたイエスが信じられずに、手に空いたそれらの穴に、使徒たちが指をいれる逸話が聖書には描かれている（「ルカ福音書」三四章三八・三九節、「ヨハネ福音書」二〇章二〇節）。イエスに空いた〈穴〉により、弟子たちはキリスト教的な世界観の獲得を可能とした。その意味では、キリストに空いた穴（聖痕）は、〈消失点〉である。

このキリストに起きたことと重なる出来事がアンダーソンの身の上にも起こる。エージェントによって弾丸でその体を撃ち抜かれ、アンダーソンは心拍停止して、死ぬ。そして、トリニティーは彼の

の顔に、〈膜〉の歪みを引き起こしてのり移る（ひとの顔に歪みが起こったかと思うと、その「仮想現実」内の住人はエージェントへと代わっている）。

学生のなかに、予言者の部屋にいた子どもが曲げるスプーンを〈消失点〉とあげているひとがいた。あるいは、その時にその子がアンダーソンに言う台詞「スプーンを曲げようと思うと曲がらない。スプーンはそこにはない。自分を曲げようと念じれば、スプーンは曲がる」を〈消失点〉ととらえた学生もいた。この子どもの発言は、人々が現実と信じて疑わないものが実はマトリックスであることを言い当てた台詞と考えられ、的を射た意見である。この考えを進めるならば、スプーンが曲がるときの映像――周囲を映し出すスプーンが固体でないようにぐにゃりと曲がる絵は――エージェントが他の人間にのり移るときの映像、更にビルが〈膜〉のように銀色に波打ってから爆発する映像と照応している。そのようなイメージの韻が見られるがゆえに、曲がるスプーンは大切な場面であると言える。

この〈膜〉としての世界を人間に与えているのは、コンピューター言語である。換言すれば、この〈膜〉を形成する材質はコンピューター言語である。「仮想現実」内の町並みは、コンピューター画面に流れる数字として解析されている。

一方、〈断片〉は、ビルが破壊して砕け散る大理石として、中心人物たちにむけて飛んでくる無数の弾丸、或はその薬莢として、繰り返し描かれていた。いくつもの弾丸が横に飛んでいき、薬莢が下に零れ落ちていく。この場面に重ねられて、「仮想現実」内の町並みなど〈マトリックス〉を解析するコンピューターの画面が映し出される。横に並ぶ数列が、どんどん画面の下に零れ落ちていく。つまり、弾丸がつくる〈断片〉は、コンピューター言語の寓意なのだ。〈マトリックス〉を創るコンピューター言語が弾丸と重ねられるのは、この映画がアクション映画であるという、その質を決定しているだろう。

学生のなかにも〈消失点〉を「弾丸のカス」つまり「薬莢」であると指摘して、「撃てば要らなくなり、落ちていくところが仮想現実の世界と同じ。弾丸の飛ぶ速さが人間の動きより遅い。現実ではありえない」と書いたひとがいた。

アンダーソンは、〈マトリックス〉から覚醒する（羊水を彷彿とさせる液体から〈膜〉を破って誕生する）。そして、救世主となるべく超人的な特訓を受ける。このような超人化した人間の出現によって、〈マトリックス〉の「仮想現実」の世界は速度が落ちて見える。スローモーションは速いスピードで自由自在に動く彼を通して見た世界だ。言い換えれば、彼の出現によって何度も繰り返されるスローモーションの世界が展開できるようになったのだ。物事がスローモーションで動くがゆえに、弾丸が見える。つまり、〈マトリックス〉から覚醒し、世界が幻影に過ぎないと気付く（コンピューター言語を解析する）ことと、世界がスローモーションになることとは、類比的関係にある。

て解析される映像にすぎない。

映画の冒頭において、出演する俳優の名前が示される画面とコンピューター画面に表れる電光文字とが重ねられている。物語内でも、〈マトリックス〉から目覚めた人たちは「仮想現実」をコンピューター解析して、「仮想現実」をコンピューター言語として画面で見る。映画の冒頭部分は、そのコンピューター解析の画面と重ねられている。更に言えば、ミスター・アンダーソンが救世主ネオとして復活を遂げたとき、彼は「仮想現実」の内部に存在しながら、その自分の存在する世界をコンピューター画面として見ることができるようになる。

「仮想現実」へのコンピューターの操作（書き換え）は、「仮想現実」の内部にいる時、救世主ネオとなる以前のミスター・アンダーソンを始めとする――コンピューターと戦っている――人物たちには、デジャヴとして体感される。黒猫が横切る場面を見たアンダーソンが、続けて全く同じような猫が横切るのを見る。それにより彼らは、コンピューターが「仮想現実」を書き換えている徴を発見できるのだ。

「マトリックス」に限らず、金子みすゞの詩や「あとかくしの雪」などで消失点を探す課題に取り組むと、繰り返される語句を挙げる学生は多い。デジャヴは、自然な状態ではそれほど起こりえない。それは時に再生産を意味する。言語によってつくられた物語においても、再び「生産されている」との意味において、それは操作の痕跡だ。繰り返されるから重要なのではなく、世界の再生産の徴を見るがゆえに、重要なのだ。

三、細部の映像が結びあうイメージの韻

「マトリックス」は、アニメのコマ割に影響されたと言われるカットに、カンフー映画の技術を移入したワイアーアクションが売りの映画であった。そして、「マトリックス」のアクションシーンは、娯楽要素としてのみ存在するのではなく、この映画が示す世界観と密接な関わりをもっている。

「マトリックス」の美術上のコンセプトについて考えてみよう。「マトリックス」では、〈膜〉と〈断片〉が幾度となく繰り返され、対立させられている。この対照関係のクライマックスに当たるのが、ヘリコプターがビルにぶつかる場面であろう。ヘリコプターがぶつかったビルは、（膜を彷彿とさせるように）一度、大きく波打ち、断片となって弾け飛ぶ。

まずは、〈膜〉から確認してみよう。コンピューターが人間に見せる「仮想現実」は〈膜〉のイメージで描かれている。これは、人間が生きていると信じている「現実」が実は「仮想現実」で、自動車のウィンドウやサングラスに映る町並みのように、スクリーンに映った幻影に過ぎないことを示している。なによりもマトリックスの白血球として働くエージェント達が、「仮想現実」内で暮らす人々

のかとの疑惑がある。他にこのような世界観をもつ映画として、ハリソン・フォード主演の「ブレードランナー」（一九八二年、ワーナー・ブラザース）、アーノルド・シュワルツネッカー主演「トータル・リコール」（一九九〇年、カロルコ・ピクチャーズ、トライスター・ピクチャーズ）、アレハンドロ・アメナバール監督「オープン・ユア・アイズ」（一九九七年）、サルヴァトーレ監督「ニルヴァーナ」（一九九七年、k2エンタティメント）などが挙げられる。これらの映画に共通するのは、登場人物たちが現実だと思っている世界は誰かに仕組まれた幻覚であり、仮想現実にすぎない点である。

人間は外界からの現実刺戟を情報化する。情報は視神経を通じて伝達され、脳で理解される。このような知覚モデルにおいて、直接、視神経や脳に情報を与えられたら、それを現実刺戟と区別することは可能であろうか。「マトリックス」での舞台が近未来に設定されているように、これはコンピューターが人間の脳にとって代わるかもしれないとの恐怖を抱くようになった現代特有の疑いと考えられるかも知れないが、そうではない。

疑い続ける主体として、自我の絶対的な基盤の確立を目論むデカルトは、現実と思っている世界が、ある高次の存在に統治されているとしたら、自分はそれを見破ることができるだろうかとの疑いから省察を始める。

そこで私は、真理の源泉たる最善の神ではなく、或る悪意のある、同時にこの上なく有力で老獪な霊が、私を欺くことに自己の全力を傾けたと仮定しよう。

そして、天、空気、地、形体、音、その他一切の外物は、この霊が私の信じ易い心に罠をかけた夢の幻影にほかならないと考えよう。また私自身は手も、眼も、肉も、血も、何等の感官も有しないもので、ただ間違って私はこのすべてを有すると思っているものと見よう。

（「省察」岩波書店、昭24・10）

このように、仮想現実と現実、それに関わる自我の問題は、哲学においても古くから問われている。

二、映像での繰り返しと詩のリフレイン

「マトリックス」で私たち観客が見せられている映像が、コンピューターの見せている「仮想現実」であると感じさせるのはどのような場面であろうか。「仮想現実」のなかを動き回る登場人物たちが、今いる場にコンピューターの操作が加わったとどのように見破るのか。

私たちにはまず画面いっぱいに表示される数列によって示される。登場する人物たちが「現実」世界と信じている、実はコンピューターが作り出し、彼らに見せている「仮想現実」は、数字の配列によっ

映像における消失点を探す、授業での試み
――映画「マトリックス」を対象に――

大國眞希

消失点を探す授業の一環として、昔話「あとかくしの雪」や金子みすゞの詩、短編小説などの他に映画における消失点を探す授業をおこなった。消失点とは、絵画の一点透視図法に見られる概念で、直接的には画面上に表れていないながら、その世界全体を統治する点を指す。描かれている物語内容ではなく、その物語世界がどのように構成・構築されているのかを考える訓練を目的としている。以下には、その試みのひとつとして、映画「マトリックス」を対象とした授業についてまとめて記す。

一、デカルトの疑いと「仮想現実」

映画「マトリックス」（一九九九年、ワーナー・ブラザーズ）を観て、この映画の消失点を指摘したうえで解説をする課題を学生に提示した。

「マトリックス」はコンピューターによって人間が支配された世界を描いた映画である。人間はコンピューターの動力源に過ぎない。カプセルのなかで膜に包まれ、羊水を彷彿とさせる液体のなかで眠る人間にその「現実」は隠され、彼らは夢を夢と気付かず、コンピューターによって生み出された夢（「仮想現実」）に生きている。睡眠中の人間は、視聴者である私たちと同じような（寝て、食べて、喋って…という）生活を送っていると信じている。しかし、その生活は「現実」にはコンピューターが見せる夢（＝「仮想現実」）に過ぎない。一部の人間だけが、〈羊水（マトリックス）／仮想現実〉から抜け出し、船で移動しながらコンピューターと戦っている。そして、〈マトリックス〉から目覚めた人間にとって救世主と目された人物（ミスター・アンダーソン。後に救世主として復活してネオとなる。キアヌ・リーヴスが演じる）が、コンピューターを打破するために立ち上がる。

物語の前提に、私たちは〈仮想現実〉と〈現実〉とを区別できる